

教える「現場」

育てる「言葉」

4

現場で学ぶ瞬時の判断力と創意工夫

視覚障害者の歩行指導を通して社会参加する

盲人更生援護施設 (財)アイメイト協会

1948年、塩屋賢一会長が盲導犬育成を志し、試行錯誤で始め、57年には国産初の盲導犬「チャンピィ」を誕生させた。71年には東京盲導犬協会を設立し、89年、アイメイト協会と名称を改定。これまでのほぼ50年間に、1000頭近い盲導犬アイメイトを育成。アイメイトを「目」として自立した視覚障害者は約1000人にのぼる。現在、年間30～35頭のアイメイトを育てる。

【盲導犬】

盲導犬の歴史は古く、紀元前79年、火山の噴火で埋もれたポンペイの発掘品に、犬に引かれて歩く盲目の音楽師の姿などが描かれた遺物が見つかった。日本では、1939年、4人の実業家が、ドイツから盲導犬を1頭ずつ輸入、陸軍に献納したのが最初とされる。本格的に盲導犬の育成が始まるのは、戦後になってからである。国内の視覚障害者の数は厚生労働省統計で約38万2700人とされる（2004年）。

高校を出て間もない若者が、真剣な表情で犬の訓練に取り組む。犬舎の清掃、排便の世話もする。盲導犬を「目」として、視覚障害者の社会参加を支援するアイメイト協会では日常の風景だ。「犬が好き」なだけではできない仕事だが、盲導犬による視覚障害者の歩行指導員を目指す者にとって、ここは仕事を通して自らが社会参加する場でもある。

見習期間中に「観察する目」を養う

夕方5時近く、1日の歩行指導が終わる。盲導犬を使った視覚障害者の歩行指導では、ときに1日10kmも歩くことがある。休む間もなく今度は盲導犬の食事の時間だ。「アイメイト協会」の建物の2階、視覚障害者が歩行指導を受ける4週間の間、指導員と共に寝泊りする宿舎。指導員は視覚障害者に犬への食事の与え方も指導する。

これからの長い時間、文字通り寝食を共にする視覚障害者と盲導犬の間に、「目の仲間」としての信頼が育まれる時でもある。歩行指導員の仕事に就いて35年、中野薫さんが、犬の扱いに不慣れな視覚障害者に助言する声が静かに流れる。人と犬の信頼関係がスムーズにいくように図ることは、指導員にとって重要な仕事だ。その様子を、見習生の1人がじっと見守る。

現在、「アイメイト協会」の職員は、歩行指導員5人、研修生1人、見習生8人、他に事務局が4人の計18人である。一人前の歩行指導員になるためには、3年の見習期間と2年間の研修を経験するこの間、見習生にとっては「観察する目」を養うことが大切になる。

盲導犬による歩行指導の現場では、予期しないことが起きる。そのどれもマニュアルで対応できる問題ではない。中野さんが、こう説明する。

「大事なのは瞬時の判断と創意工夫です。盲導犬が視覚障害者を正確に誘導しないときにどうしたらいいか？ それは状況によって皆違います。その場で自分で考え、適切な解決法を見つけて、指導しないとイケない。歩行指導員に求められるのは、その時々判断力です」

そのときのためにも普段から視覚障害者と盲導犬の動き、先輩指導員の反応を観察することが重要になる。「どんな小さな動きも見逃さないことが大切です」と中野さんはいう。

路上で歩行指導を受ける4週間、視覚障害者はざっと130



見習生にアイメイトの訓練を指導する中野さん

kmほどの距離を歩く。その間、さまざまな状況に応じて盲導犬との呼吸を合わせていくが、それには見習生も付き従うことが多い。視覚障害者にとっても、見習生にとってもかなりのハードワークだ。

ある見習生が、協会の機関誌にこう書いている。「自身の未熟さを思い知らされ、いい経験をしている。鍛練を積み、訓練・指導を学ぶことで、様々な出会いを経験し、自分を成長させていきたい」

本当に視覚障害者の自立を支援しようと思ったら、視覚障害者と1対1の人間として向き合う場面も出てくる。しかも多くの場合、視覚障害者は歩行指導員よりも年齢が高く、人生経験を積んでいる。日常生活を含めて、そういう人を指導するという事は、指導する側の人間性が問われることを意味する。「そのためにも自らを磨かないといけない」と、若い見習生はいう。

「主体は人間である」という基本理念

現在、日本には盲導犬に関係する団体が9団体ある。歴史的には「アイメイト協会」が最も古く、協会がこれまでに育ててきた盲導犬は、1000頭近くにもなる。「アイメイト」とは、アイメイト協会で育成された盲導犬に対する協会独自の呼び方で、「私の愛する目の仲間」を意味する。

協会にとって重要課題の一つは、歩行指導員の養成である。指導員の仕事は、大きく二つある。盲導犬の候補犬ラブラドル・レトリバーに基礎訓練、誘導訓練を施し、「アイメイト」に育て上げること。そして、視覚障害者に「アイメイト」を使って歩行する技術を指導することだ。

塩屋隆男理事長は、歩行指導員を目指す見習生に常にこう話しかけているという。「ここでは犬の訓練もしています。しかし、メインの仕事はその先にある。『自分で歩く』という視覚障害者の意欲をバックアップすることです。人との付き合いが苦手なので、好きな犬の世話をしたいという人もいますが、この仕事ほど人と濃密に向き合う仕事はない。まずそれを理解しないと、歩行指導員は務まりません」

協会の建物には、点字ブロックや点字プレートなど視覚障害者の歩行を手助けする設備が一切ない。ここには「アイメイト協会」の理念が込められている。

「視力はなくても、自分でできることは自分でする。人の助けを受ける立場からむしろ『与える立場』に変わることが大事です。視覚障害者が、依頼心を捨てて、自主独立の精神で社会参加する気持ちが大切であり、私たちはそのお手伝いをしているのです」と、塩屋理事長はいう。

点字ブロックや点字プレートが必要な場所もある。だが、それ以外のところでは、そうした設備に頼らなくても、視覚障害者が盲導犬といっしょにどこでも自由に外出できるようにする。「アイメイト」を連れている時、晴眼者の手を借りず、白杖も使わないのは、「自分で歩く」という視覚障害者の意思を大事にしているからだ。

「主体は人間」の考え方は、歩行指導員の養成にも反映される。「盲人にできないことにだけ手を貸す」との方針で、視覚障害者が普通の人と同じ生活が送れるように助言することを要求するのだ。それは歩行姿勢から言葉遣い、ナイフやフォークの使い方、食事の仕方など日常生活の態度にまで及ぶ。指導する側も視覚障害者と「1人の自立した人間」として対応するのである。

見習生8人は女性が6人に男性が2人。皆18歳から22、3歳と若く、大学を出てこの仕事を選んだ者もいる。視覚障害者の自立を支援するために、若者に求められるハードルは極めて高い。

「自ら体験し、考え、学ぶ」が成長の鍵

見習期間の3年間は、毎年の大よそのカリキュラムが決まっており、犬の飼育、管理、衛生、生態から始まり、犬の心理や繁殖、血統、遺伝、あるいは獣医学の初歩的な知識を学んでいく。

こうした犬に関する知識の習得と並行して、点字や社会福祉、盲人の心理、目の構造・疾病などに関する基礎も勉強する必要がある。とはいえ、教室で教えてもらうのではなく、あくまでも実践主義で、「自ら体験し、考え、学ぶ」が基本だ。見習生になって2か月もすると、犬を訓練する仕事も始まる。最初は親切に教えてもらっても、後は自分で考えてやることになる。

見習生の1日の仕事を見ると、朝8時に全体のミーティングがあり、続いて全員で犬舎の清掃、犬の排便、ブラッシング、飼料づくりなどの雑用をこなす。犬舎には70頭ほどの犬がおり、この作業を手際よく進めなければならない。

2年目に入ると、自分が担当する犬の訓練に取り組む。特に前方に障害物がある場合や、頭上に何か飛び出しているものがあるときなど、視覚障害者がぶつからないよう回避して通る訓練をする必要がある。経験が浅いと試行錯誤を繰り返す。

見習生が視覚障害者の歩行指導に少しずつ関わるようになるのは、3年目に入ったところからである。前出の見習生のように、先輩指導員が歩行指導をしているのを観察することから入り、徐々に指導役を譲られていく。研修生になると、自分で歩行指導を担当するなど視覚障害者との関わりは深くなる。

歩行指導員に求められる資質について、塩屋理事長はこう話す。「相手の気持ちを理解し、その立場に立てるかどうかです。その人の気持ちになるということは、決して同情することではありません。人間としての幅が非常に重要になります」

見習生・研修生には、人前で「話す場」を設けて、自分の考えを発表させることもある。指導員にとって、自分の考えを目の見えない相手に正確に伝えることが不可欠なこともあるが、話すことでその人の人柄が分かるからである。

視覚障害者が自立するプロセスに関われる喜び

5年間の見習と研修を経て、協会の理事が「合格」の承認を出すと初めて歩行指導員になることができるが、仕事のハードさに、途中で辞める見習生もいる。だが、それでも指導員になりたくて頑張る若者がいる。定期的に募集するわけではないが、応募者も募集人員の5～6倍は来る。「そこに他にない魅力があるからではないですか」と塩屋理事長はいう。

「歩行指導で常に行動を共にしていると、視覚障害者に精神的な変化が生じてくるときがあります。『アイメイト』によって主体的に生きていける喜びから、人生観や生き方が変わってくるのです。指導員はそのプロセスに関わっている。若い人にとっても、それは嬉しいと思います」

あるとき、ようやく「アイメイト」の訓練に携われるようになった見習生が、やはり機関誌にこう感想を書いた。「使用者が『アイメイト』と共に旅立っていく姿を見ると、この仕事は犬の訓練ではなく、使用者一人ひとりの人生を豊かにすることだと感じる」

この見習生も「犬が好き」というのが、この道を選んだもともとの動機である。それが見習生になって1年余り、自分の使命の重さを自覚するようになった。歩行指導員という仕事は、視覚障害者の人生に深く関わることで、指導員自身が社会と向き合っているのである。

公道を使った歩行訓練

